

「南伝仏教」研究必携の初の図版・解説資料集！

南伝仏教
の世界

著者略歴 金子 民雄 (かねこ たみお)

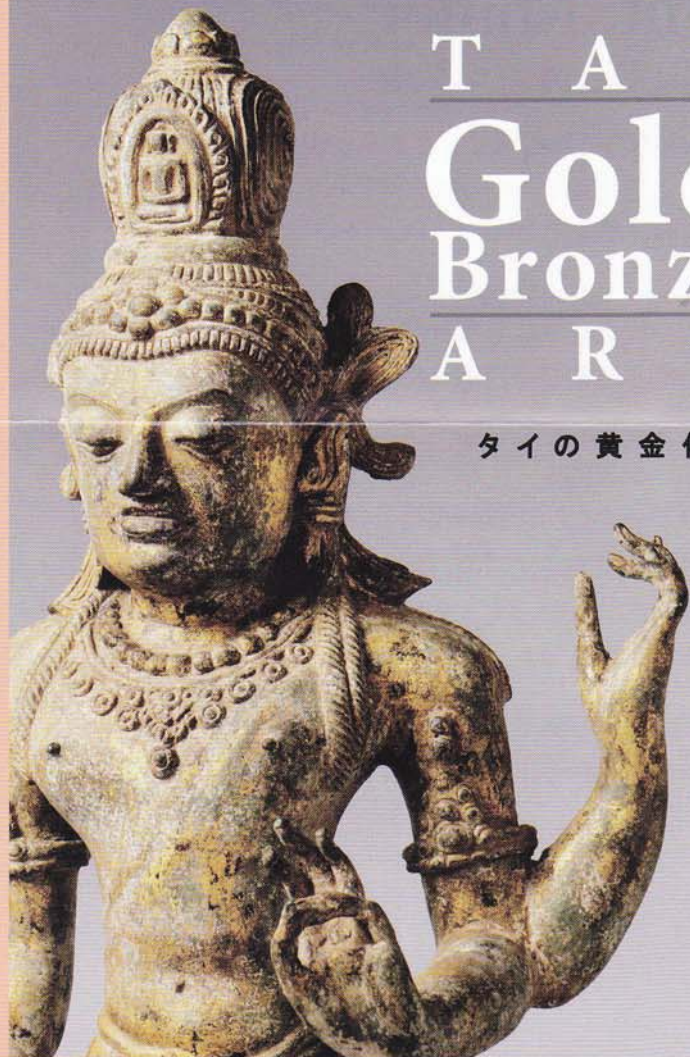
1936年東京生まれ

日本大学商学部卒業後、中央アジア史の現地調査・研究を続ける。

哲学博士

T A I
Gold
Bronze
A R T

タイの黄金仏



東日本大震災復興祈念出版

タイの
黄金仏

監修

金子

民雄

写真撮影

渡邊

久美

ごあいさつ

インドシナ半島の中央部を占め、永いことシャムと呼び慣らされていたタイで、この千数百年の間おびただしい数の仏像が造られた。そのごく限られたものを、このささやかな図録を借りて紹介してみたいと思う。これまで蒐めてあった幾体かはすでに散出してしまったため、いささか寂しいものとなったが、ご覧いただければ幸いと思っている。

一般にタイと言っても、わが国のように単純な民族構成でなく、現在のタイ族が北方から南下移住し始めたのはせいぜい十一世紀以降のことで、当時、この地方一帯はコーム（クメール）人たちの居住地域であった。そのため彼らの造る仏陀像はタイ族のものとは違ったイメージを与え、うっかりするとカンボジアで造られたものとはっきり区別することがむずかしい。そこで一部を除き、クメールのものと思えるのはここでは除き、別の機会に譲りたいと思っている。

一方、八世紀以降はインドネシア（ジャワ）のポロブドールや、スマトラ島の室利仏逝から南タイに進出したというインドのグプタ美術の影響を受けた、シェリーヴィジャヤがあり、仏教美術の世界でも大変複雑な様相を呈しているように思える。ともかく南伝仏教の一端を見ていただけたら幸いと思っている。

編者 金子民雄

定価 3,000 円 (税別・送料別)

◇ B5判・本文 65 頁・図版オールカラー・並製本

◇ お申し込みは、ハガキ、TEL、FAX にて (書店注文可)

◇ お支払いは、商品が届いてからの後払い (局振替用紙)

〈発売〉 展望社

〒112-0002 東京都文京区小石川 3-1-7

TEL 03-3814-1997 FAX 03-3814-3063

〈発行〉

佛教図書出版
CD・DVD制作

USS出版

〒175-0005 東京都豊島区南大塚 3-1-6

TEL 0120-482-471 FAX 0120-482-472



金子民雄氏(かねこ・たみお)氏=1936年東京生まれ。歴史学博士。大学卒業後、中央研究院に在籍し、『タイの黄金仏』『古代クメールの神像』など著書多数。訳書に『ヘンリック・ヤンクハスバンドの日記』など。

いい仏像は見る者の心に語りかけてくる

仏像を追うことで明らかに、世界の横のつながり

近年、仏像ブームなるものがにわかに取り沙汰され、若い世代にも仏像鑑賞が広まっている。だが、日本の寺院にあるのは展覧会で目にするものとは異なった海外の仏像についてはどうだろうか。『タイの黄金仏』『古代クメールの神像』という二つの書

が、11世紀に雲南に住んでいたタイ族が大挙南下してきて、クメール族カンボジア人を追い出しここに居座ります。東(カンボジア)に移ったクメール族もい

う、インドのナーガの神話からきています。ですから、この仏像一つをとっても、同じ仏教でさまざまな繋がりが見えてくるんです。同じロブリー様式の仏像で蛇の上に座っていて、手に三角形の器のようなものを持っているものがあります。これはいくつか見落としてしまっただけでも、どうもお茶の葉を入れた器ではないかと思われま

す。タイ族がやってきた雲南はお茶の産地ですから。当時、お茶は葉のままからね。だからこれはいわゆる葉煎茶でしよう。仏像一つひとつ

を追いかけていくと非常に面白いですね。奈良の大仏開眼供養のとき、聖武天皇は参列者に茶を配ったと言われていますから」

巻末の年表を見ても、タイの仏像もクメールの仏像(神像)も、製作されたのは日本の奈良〜鎌倉時代に集中している。南伝仏教は日本には伝わらなかつたと言われているが、日本の仏像とのつながりは気になるところだ。

「日本とタイやクメールの仏像(神像)を比較している人はあまりいないようですね。なぜかと言うと、日本にはそれらの現物がそうないからで

す。たゞしばしばカンボジアでは戦争や動乱が続き、支配団体のフランスがいちいものはずべて持っていってしまった。そのおかげで、保存状態のよいものは残されてはいらぬんですが、門外不出ですから、なかなか日本人は目にする事ができません。

タイの仏像は奥が深いですが、どうも日本人は、ある時代のものにつかかって好きになると、その系統に集中してしまう。同時並行的にさまざまなものが生まれているのだから、他にはあまり関心を示さず、比較が進むと、とんでもない事実が浮かび上がってくる可能性がある。だから、こ

を追いかけた。ここに留まる者もいました。するとタイ族とクメール族の混血が生まれま

す。面白いのはここから、そこで仏像までが混血してしまつた。つまり、顔つきはタイ族の仏像だけれど、体つきはクメール族の様式を持つ仏像が作られたり、あるいは装飾が交ざっていたりするのは、

「タイの黄金仏」には、たとえば蛇の上に座っているロブリー様式の仏像を載せていますが、蛇に乗っているのはカンボジアのヒンズーの発想で、タイではない。それも元々は、蛇がとろろを巻いて大雨から仏陀を救ってくれたとい

う、これを踏み入れたのだろう。「これまでに仏教の遺跡はずいぶんと見てきました。特に廢墟となっている寺院を多く見えています。ヒンドゥー教徒もイスラム教徒も仏教寺院

をつぶしてきましたから、そこを見て回っていました。ヒンドゥー教と仏教は仲間なんだけれど、インド人と仏教とは精神的にそりが合わないようです。仏教はもともと禁欲的ですからね。

とあるインド人に、かつてこう言われたことがあります。『日本の仏教は借り物なんだよ』と。それは仕方ないですよ。その通りですから。さらに、日本人は明治以前には仏教の本場に戻って行っていない。仏教が日本に入ってきたから千数百年のあいだ、日本人は主に自分たちのイメージだけで仏像を作ってきた。だからあれは本場の仏像じゃない』と言われたときには少し腹が立ちましたけれど、こちらの心に語りかけてきますよ」



▼金子民雄監修『タイの黄金仏』7・10刊、B5判六八頁・本体三〇〇〇円・廣泉社
▼金子民雄監修『古代クメールの神像』1・30刊、B5判六四頁・本体三〇〇〇円・廣泉社